

## 立山砂防のオッカチャン応援隊

吉友嘉久子

(OFFICE・よしとも代表)



砂防のことなど、何も知らなかった。常願寺川が天井川だったことさえ知らなかった。春に雪解け水を集めてきらきら光る川が、夏にはだだっ広い河川敷に変わる。平野部に住んでいる身には、ごく日常的な光景だった。暴れ川と恐れられたこの川を鎮めるために、どれだけ多くの人が汗し身を粉にしたかを私が知ったのは、ほんの14～15年前のことである。

常願寺川の河口から上流までをたどって、工事に携わった様々な人たちのドキュメントを一冊にまとめてほしい、という依頼が舞い込んだとき、正直なところ荷が重過ぎると思った。直前に、人間ドキュメントふうの本を初めて上梓したばかりだったが、それはラジオパーソナリティーだった十数年に及ぶ出会いの中から生まれたもので、登場した人は、みな個々の事情はあっても“生活人”だった。確かなのは、私が普通の主婦だったから聞くことができたと書くことができた、ということである。それなのに依頼されたのは、いわば“お上”のしてきた仕事の取材だ。耳新しい「治山」「治水」という言葉の響きにも戸惑った。国の施策に従ってお役人がしてきたことを、普通の主婦が簡単に理解できるはずがない。

そう言って尻込みしたが依頼者は引き下がらなかった。現場を実際に見て、そこで働いた人、今働いている人の話を聞いて、感じたことを、率直に私の言葉で書けばいい、と言う。工事関係の歴史や技術的なことは、その道の専門家の手ですでに何冊も完成している。しかし、そこに書かれていないたくさんの人たちの存在がなければ、暴れ川は治まらなかった。石ころを一つ一つ、手で運んだ人がいる。荒くれの男たちに慕われた賄のおばちゃんだっている。工事に関わった“普通の人たち”のことを書いてほしいのだから、専門知識は要らないのだ、とまで言う。そして、私は折れた。

はじめて目にした崩れは修羅のようだった。赤茶けた山肌が四方八方で天を衝く。あの縁が弥陀ヶ原、と指差されて高みを見上げる。立山黒部アルペンルートの足元をえぐる巨大な窪地の底、砂も水も音も吸い込むカルデラの真ん中で、押し寄せる静けさに背筋があわ立った。私は何も知らなかった。150年も前の鳶崩れの2億 $m^3$ ともいわれる崩壊土砂が、今も土石流となって下流を襲う危険性があるなんて。それを防ぐために100年も前からここで命をかけて崩れに挑んでいる人たちがいることも、平野がその人たちに守られていることも知らなかった。その衝撃が、砂防への第一歩になった。

2年余りカルデラに通いつめ、ようやくの思いで『巨石が来た道』を書きまとめた。務めは果たしたが、私は山で出会った人たちの温かさが忘れられなかった。そして、下流で暮らす人たちに、災害を未然に防ぐ砂防事業の重要性を少しでも知ってもらうことが、山の人たちの真心に報いる行為だと信じて、各地へ出かけて行っては立山砂防に生きる人々のことを語った。しかし、1人で語るよりも2人の方が、2人よりも10人で語るほうがパワーは大きい。命を守る仕事なのだから命を育む女性の視点で、何よりも生活者の視点からわかりやすい言葉で、と、思いは広がった。

そんな一方的な熱い思いを立山砂防事務所所長だった森山裕二氏に打ち明けて、女性砂防サポーター構想が小さな一歩を踏み出した。サポーターを募るために思いついたのが、私がはじめてカルデラに足

を踏み入れたときの衝撃の迫体験だった。体験にまさるテキストはない。とにかくカルデラに入って感じてもらう。荒々しい崩壊地で暮らしの安全について語り合い、防災意識を高めて、一人一人に立山砂防の語り部になってもらう。こうして、「女性サロン in カルデラ」がスタートした。

第1回は平成9年10月21日。自分たちのカルデラ体験をメンバーに伝えようという趣旨に賛同した様々な団体のリーダーたちが、千寿ヶ原からトロッコに乗り込んだ。いずれ劣らぬたくましさを自負する富山の“オッカチャン”たち20人である。標高差640m、全長18キロメートルの軌道を、スイッチバックを繰り返して登る。工事の前線基地である水谷平（みずたにだいら）まで崖と深い谷のあわいを約2時間。「アレー、なんちゅうすごいがー」「キャー、おとろしいぜえ」などと黄色い声が上がリ、なんとなく遠足の雰囲気だった。しかし、車に乗り換えカルデラの懐深く入るにつれて、声はしだいに小さくなっていった。

窪地の底、多枝原（だしわら）平に立つと、大鳶山と小鳶山の崩壊の跡が目の前に広がる。いまにもザザーッと崩れ落ちそうなもろい斜面。時折小さな岩が乾いた音をたてて落ちてくる。オッカチャンたちは身をこわばらせて完全に言葉を失った。現場での技術者の説明は、それに追い討ちをかける。普段、つるはしを打ち込んでも硬くて歯が立たない土砂が、雨が降り続くとドロドロになって、岩を巻き込み周りを崩しながら谷を雪崩れ落ちる。目の前に見える斜面は土石流の常襲地帯だ、と。

オッカチャンの1人がおそろしさに抵抗するように尋ねる。「あの、宙ぶらりんになってる網は何ね?」。指差すはるか上方に、大量の土砂がたまってしなったネットが見えた。土砂が一気に暴れないように勢いをそぐのだ、という説明に、別の1人がおずおずと尋ねる。「あんな高いところの土砂は、どうやって片付けるんやろか?」。天気が続いて土が固まったところ、ネットの上流側に重機を上げて取り除くと聞いて、みんな苦しそうに肩で息をし始めた。崩れもろとも転落しそうな急斜面での作業がどんなに危険なものか。私も動悸が激しくなる。安全対策が年々進んできてはいるが、予測を超える事態もあるのだ。

「よう、こんな恐ろしいところで——」「はじめて知ったちゃ」「なあーんも知らんとおったがやねえ」。オッカチャンたちのつぶやきに、しだいに力が加わる。普段から自分たちにできる備えをしていこう。若い人たちにも伝えなくてはいけないね。子どもや孫に語ることから始めようか。今日からでも始めなくては——と。現実を直視し、心揺さぶられたオッカチャンたちは、こうして砂防の語り部になっていった。

その一人一人の思いが次々とパトタッチされ、5回を数えたときにカルデラ体験者100人で「立山砂防女性サロンの会」へと発展させた。砂防に関する講義を受けたり、講演会やイベントに参加したりし、近隣の砂防現地見学ばかりか海外の砂防前線を訪ねる研修も実施している。その甲斐あって、「なあーんも知らなかったちゃ」が、「ちょっこし、わかったちゃ」の喜びに変わってきたようだ。

今年は迎えて10回目。近年、台風や地震、豪雪など自然災害が続いたこともあり、防災、“減災”への関心も高まって、この“オッカチャン応援隊”の活動に目を向けてくれる人も増えた。カルデラ体験者以外の入会者もあって、現在会員は280人。カルデラで汗する人たちに守られていたことも知らず、ぬくぬくと暮らしてきた街のオッカチャンたちだが、目覚めてからのスクラムは堅い。がっちり土砂を受け止めるえん堤のようだと、私はひそかに思っている。

